



理事長挨拶



吉村 剛太郎

玄洋社記念館

理事長 吉村 剛太郎

謹啓 賛助会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、新型コロナウイルス感染症の拡大により私たちの日常生活は様変わりし、ワクチン接種や経口薬の開発など様々な方策は講じられておりますが、未だ収束が見えてこない状況にあります。賛助会員の皆さまもその影響を受けておられるこ

とご拝察申し上げます。このような状況下ですので玄洋社先覚の各顕彰行事等も中止の已むなきに至っております。新型コロナウイルス感染症収束の折には、鋭意、玄洋社記念館本来の活動を再開する所存であります。その節は、賛助会員各位のご協力を賜りますようお願い申し上げます。また、本来でしたら、館報「玄洋」本号(百四十号)も昨年九月一日付け及び本年一月一日付けで賛助会員の皆さまへお届けすべきところであります。届けずば、館報編集者の計報もあり、作成作業が遅

館報
玄洋140号
令和4年3月31日
発行
一般社団法人
玄洋社記念館
郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6番36号
西公園ハイツ201号
電話 (092) 762-2511
FAX (092) 762-2502

玄洋社憲則
第一条 皇室ヲ敬戴ス可シ
第二条 本国ヲ愛重ス可シ
第三条 人民ノ権利ヲ固守ス可シ

事務所移転のお知らせ

滞致しておりました。皆さまには多大なるご迷惑をお掛け致しておりますこと、心よりお詫び申し上げますとともに、ご報告申し上げます次第であります。つきましては、今回の移転先は左記の通りになります。これを機に、関係者一同一層の努力をいたす所存でございますので、何卒今後とも倍旧のご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

この度、福岡市中央区荒戸の一般社団法人玄洋社記念館の現事務所は4月末をもって移転します。つきましては、移転先は左記の通りになります。これを機に、関係者一同一層の努力をいたす所存でございますので、何卒今後とも倍旧のご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

新住所

〒814-0013
福岡県福岡市早良区藤崎2丁目12-11

E-mail: genyosha.kinenkan1@gmail.com

今号の主な内容
▽理事長挨拶 1面
▽事務所移転のお知らせ 1面
▽「廣田弘毅先生顕彰祭」中止のお知らせ 1面
▽梶原昂理事計報 2面
▽賛助会員芳名録 4面



廣田弘毅先生の顕彰祭

お知らせ

「廣田弘毅先生顕彰祭」

本年も中止致します

例年五月に斎行しております「廣田弘毅先生顕彰祭」は、新型コロナウイルス感染症防止のため、本年も中止することに致しました。

廣田先生の顕彰祭は、新型コロナウイルス禍のため昨年も中止致しました。三年続きの中止は誠に残念なことですが、やむをえず決断した次第です。

各位には、なにとぞご了承くださいますようお願い申し上げます。

一般社団法人 玄洋社記念館

福岡 だより

第19回世界水泳選手権

2022福岡大会は

2度目の延期に

本年5月に開催予定でありました世界水泳選手権福岡大会は新型コロナウイルス感染症の拡大により残念ながら2度目の延長となりました。

参加人数は約1900カ

国・地域より約2、400人を予定しており、来場者は40〜50万人を想定しています。競泳、飛込、水球、

アーティスティックスイミングなど6種別76種目の競技を予定しております。福岡市の特徴であるコンパクトな都市構造を生かし、大会環境はコンパクトながら大会価値の最大化の実現に向け、マリノメッセ福岡や地行浜での特設プール等を活用し、コンパクトなエリアに競技会場やマーケットストリート等を集約することで、選手の移動負担の軽減、大会全体の盛り上げ、効率的な大会運営を計画されています。

開催期間は2023年7月14日(金)〜7月30日(日)の17日間

訃報

玄洋社記念館理事 梶原 昂 逝去

玄洋社記念館理事及び館報「玄洋」編集者の梶原昂氏(享年八十一)はかねてより病氣療養中のところ昨年十二月十一日に逝去されました。



梶原理事は長年に亘り事務局として玄洋社記念館の運営、顕彰祭等の行事を的確に遂行し、また編集者として精力的に現地に赴き取材を行い、玄洋社の姿を正しく後世に残すべく本館報の作成、発行など多大なる貢献をされてこられました。その献身的な偉功に感謝し、心よりお悔やみ申し上げます。

第19回 FINA 世界水泳選手権 2022 福岡大会 マスコット



令和4年度

会費納入のお願い

賛助会員の皆様には、日頃から玄洋社記念館の活動にご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

【賛助会費の額】

▽個人会員 10万円
▽法人・団体会員 100〜300万円

さて、玄洋社記念館

は、四月一日から令和4年度分の賛助会費の受け付けを始めさせていただきます。

コロナ禍にあり、皆様も大変な状況下で、はなはだ心苦しいところではありますが、何卒よろしくご協力お願い申し上げます。

また、今年度より現金でのお振り込みの際には振込手数料が発生

【郵便振込】口座番号 0117701120738

【銀行振込】西日本シティ銀行赤坂門支店 普通預金 口座番号 0740047

宛名はいずれも「玄洋社記念館」です。

筑前風涛録

頭山満と玄洋社

柳 猛直

〈24〉

題字は進藤一馬福岡市長

試練の時代

彼(平野國臣)は目的を達することなく五条を去り、報告のため京都に帰るのだが、京都の情勢は一晚のうちにがらりと変わっていた。八月十八日の政変で尊攘派は一掃され、平野の帰るところもなくなっていた。憂さ晴らしに祇園に直行する。その夜、平野の宿所には新選組が踏み込んでいた。危機一髪、難を逃れたのである。後に郷里の友人に宛てた手紙に、その間の事情を述べて

「これまで登樓の損はあれども一得なかりしに、昨夜の登樓にてこれまでの損はすべて償い申し候。ご一笑下さるべく候」と言っている。

京都にいられなくなった平野は但馬・生野(いくの)に出て天誅組に呼応して義兵を挙げる。実はそのころ天誅組は既に潰滅していたのである。

平野は生野拳兵の首領に頂くため長州に下って七卿の一人、沢宣嘉を引き出し生野の代官所に立てこもった。しかし、確たる戦略があったわけではなく、武器も兵員も不足していたので、またたく間に周辺の但馬、出石(いづし)の藩兵に囲まれて潰走する。

平野は脱出の途中、豊岡藩に捕まり、京都・六角の牢に送られた。牢内で年を越して文久四年、

「玄洋社」は明治十二（一八七九）年に設立された。以降、大正、昭和、平成を経て百四十二年の時が流れた令和の今日、「玄洋社」は人々にどのような認識されているのか―「玄洋社」研究の第一人者で、本紙連載「玄洋社関係資料の紹介」の筆者、石瀧豊美さんに、自身の今後の研究課題とともに述べてもらった。

私の「玄洋社」研究

昭和史の中の玄洋社の位置づけを追究

石瀧 豊美

玄洋社生みの親と言われる眼科医・高場乱（おさむ）を調べようと思いついたのは昭和五十（一九七五）年九月二十日のこと。西日本新聞掲載の「無冠の群像」が高場乱を取り上げたことがきっかけだった。今から四十六年前、私は二十代の半ばだった。

研究を志した私は、最後の玄洋社社長進藤一馬



石瀧 豊美さん

さんの紹介で明道館の財部一雄さんに会い、財部さんの紹介で杉山茂丸の孫・杉山龍丸さんを訪ね、秋月の乱の新聞記事を頼りに亀陽文庫（福岡県朝倉市秋月）を運営していた庄野寿人さんに連絡を取った。占領軍の命令で玄洋社が解散して三十年目。福岡には玄洋社ゆかりの方々が多くいた。何

とする空気が強かった。学問の世界でどう評価されるかではなく、玄洋社をじかに知る人たちの実感が私のスタート地点だった。通説・定説の側が誤っていることに気づくと、それを正すために史料や証言を追い求めた。その頃も今も確信をもつて言えるのは、玄洋社は単なる政治結社ではないし、まして右翼や侵略主義というくくりでかたづけられるのは間違いだということだ。しかし、辞書や事典の類いでは今もそれらが正当な見解とされている。

さすがに福岡では一般市民でも玄洋社に関心を持つ人が多い。玄洋社や頭山満について学びたいと、議員や経営者や市民向け講座や公民館からも声をかけられることがある。どこでも同じ話をした。福岡の現在があるのは玄洋社の人たちの努力があったからだ、と。政治的主張を排除して、右も左もなく歴史があるがままに見ようとすると、玄洋社や頭山満や高場乱の真実の姿が浮かび上がる。変わり者でしかなかった男装の女傑・高場乱をジェンダーの視点で見ることが、今ようやく可能になった。時代が後から追いついてくる思いである。

二月に改元があつて元治元年。七月十九日には蛤御門の変が起こつた。どさくさにまぎれて六角の牢に収容されていた志士は処刑される。平野もその一人であつた。この時、三十七歳。彼は新選組の手にかつたという説があるが、これは誤りで処刑は町奉行の手で執行され、それも奉行の一存で行われたものらしい。

のちに奉行の滝川播磨守が京都守護職・松平容保に呼びつけられ、ひどく叱責された。特に平野の処刑をとがめられたという。

会津藩主・松平容保は維新後、朝敵呼ばわりをされるのだが孝明天皇の信任が最も厚かつたのは、この人であつた。

禁門の変（蛤御門の変）を起こした長州に対して幕府は元治元年（一八六四年八月）懲罰の軍を起こす。この時、福岡藩を代表して現地に出向いた加藤司書は薩摩の西郷隆盛等とともに幕府と長州の間に立つて調停に尽力した。

結局この時は長州藩の恭順によつて戦火をまじえることなく事態は収拾される。司書は藩主・長薄の意を体して幕長間の折衝に当たつたのだが無血解兵の目的を達すると広島島の宿舎に帰つて部下の藩士とともに祝杯をあげた。

この時、司書が心境を述べてうたつた筑前今様が有名な

皇国（すめらみくに）の武士（もののふ）はいかなることをか勤べき 只（ただ）身もてであつたという。司書は十二月二十七日広島をたつて翌年正月、福岡に帰るのだが、長州での功績を認められて家老職に任ぜられる。筑前勤王派の首領として加藤司書の存在が、いよいよ重きをなす。

（この項続く）

賛助会員投稿

テーマ「新型コロナ禍に思う」

「コロナ収束」と「祥瑞改元」

匿名

「令和」と初めて耳にした時「おやつ？」と思つたのをよく覚えてい

の「初春の令月にして気淑く風和ぎ梅は鏡前の粉を披き蘭は珮後の香を薫らす」によるとされ、推

「令甥」、「令姪」などの語を意味するのだということらしいが、普通は前者のように受け取る。

過去には「祥瑞（しよろずい）改元」もあった。会社の転勤で福岡に五

Advertisement for various companies including Haradoi Hospital, Beppu, Akira, and others, with contact information and logos.

西郷隆盛は

征韓論者にあらず

⑪

〔昭和六十一年四月発行「玄洋」特別号外版より再録〕

近代史家たちの怠慢と 偏見の結果だ

〈2〉

木俣秋水

更に新論「新しい社会」——歴史的分野——著作者は専修大学教授鶴飼信成、上智大学教授川田侃、編集委員市川建夫東京学芸大学教授以下二十八氏による教科書には二〇九ページ中国、朝鮮との関係に「政府は清との関係に維新後間もなく対等な条約を結んで正式の国交を開いた。又、朝鮮は鎖国の対策をとっていたので政府との交渉を拒んだ。そのため政府の中に西郷らを中心として、朝鮮を武力で開国させ日本の勢力を伸ばそうという征韓論が起った。この主張は、政府のやり方に不満を持つ士族達に支持されたが、欧米から帰国して国

内改革を優先すること、を説いた大久保利通らが反対した。ゆえ、西郷や板垣退助らは辞職して政府を去った。そして中学社会——歴史的分野——著作者京都大学名誉教授井上智勇氏以下九氏には一九ページ領土と外交の項に「朝鮮とも国交を開こうとしましたが、朝鮮は応じませんでした。そこで西郷らは、朝鮮を武力を用いても開国させようとする征韓論を主張しました。次いでお茶の水女子大学教授青木和夫氏外十五氏の執筆、編集の二一七ページ、外交の展開の中に「一方、近くの

国々とは、先ず清との間に条約を結んで国交を開いたが、鎖国政策をとっていた朝鮮は交渉に応じなかった。そこで西郷隆盛らは、新政府の政治に不満を持つ士族の力を外に向けての為もあって、一八七三年、征韓論を主張した。然し、欧米から帰国した岩倉らは国内の政治を整え、国力を充実させることが先であるとして、西郷らを抑えた。この為、之を不満とした西郷や板垣退助、江藤新平らは、辞職して政府を去った。最後に立正大学教授北島正元、成蹊大学教授佐藤竺、横浜国立大学教授野村正七氏らを監修者とする教育出版KKの新版中学社会二二九ページ、明治初期の外交の中で「朝鮮に対しては、政府は日本に有利になるような形で国交を開こうとしたが、朝鮮は之に応じなかった。その為、政府の中には西郷隆盛、板垣退助らを中心に武力を用いても国交を認めさせようとする征韓論が強くな

った。然し、一八七三年、欧米から帰国した岩倉具視、大久保利通らは国内を改革して国力の充実をはかることが先だと主張し、征韓論を抑えた。その為、征韓派は一斉に政府の職をやめた」云々。以上が中学教科書である。続いて筆者の住む京都市の京都市立高校が使用している五種類の教科書——先ず時野谷勝、原田伴彦、直木孝次郎「日本史改訂版」一七四ページ、国際社会への登場の項、朝鮮との国交は幕末以来断絶して居たので、政府は国交再開を求めたが朝鮮は排外政策をとって、之に応じなかった。そこで我が国は一八七三年

（明治六年）、武力行使を決意して朝鮮に対する要求を通そうという征韓論が起った。然し、欧米視察から帰国した岩倉、大久保、木戸等は内政を整備することが急務であると主張して之に反対し、征韓論を唱えて居た西郷隆盛、板垣退助、江藤新平らは辞職して政府を去った。又、同書一七八ページ、不平士族の反乱には「封建的特権を奪われ家禄を失った士族は大きな不満を抱き、政府の革新政策に反抗する者が現れてきた。殊に征韓論に敗れて西郷、江藤らが政府を去ると、彼等

は不平士族の反政府運動の首領に推されるようになり佐賀の乱を始め、不平士族の反乱が続いた。又、三省堂の「高校日本史」——京都府立大学教授門脇禎二、同藤井学、京大助教授朝尾直弘、奈良女子大学教授中塚明、龍谷大学教授木坂順一郎、京都府立大助教授井口和起共著——にはその二〇〇ページ十章近代国家の成立と文化の近代化（その三）明治初年の外交「朝鮮との国交交渉が進まな

いまま、岩倉らの不在中の政府では一八七三年、政府首脳である西郷隆盛、板垣退助らが中心になって強硬な征韓論を主張し武力行使の方針を定めた。彼等の主張の背後には対外出兵によって国内の緊張を高め、全国の士族の不満を解消しようとする意向もあったが、欧米視察から帰国した大久保利通始め、岩倉や木戸孝允らも、内治の急を説いて朝鮮への出兵に強く反対した。その結果、政府は分裂し、西郷らは下野した」。



「西郷南洲翁隠家跡」碑（福岡市中央区月王寺の跡地。薩摩の僧侶が、西郷が身を隠した油蔵元を舞鶴1丁目）。

7面に続く

6 面から続く



本南熊原坂「田原坂」の激戦地西南戦争
市北区植木町=近くに田原坂西南戦争資料館がある

続いてKK山川出版社発行、東京大学教授石井進、同助教授伊藤隆、同名誉教授井上光貞、前立教大学教授大久保利謙、前東大教授笠原一男、学習院大学教授児玉幸多、東大助教授高村直助、東大教授土田真鎮、東大名譽教授藤木邦彦、同宝月圭吾共同著作による標準日本史によると、その中の近代国家の成立―二〇二ページ、初期の国際関係の所では「岩倉大使一行が帰国した一八七三年（明治六年）、国内では征韓論が強硬に主張されていた。日本が朝鮮を開国を求めたのを朝鮮があくまで拒否したので西郷隆盛、板垣退助らが武力

を行使しても要求を貫け、と主張したのである。然し、岩倉、大久保らは内治優先を唱えて之に反対したので遂に征韓論は敗れて西郷らは官を辞して野に下った。又、同じ陣容での著作者によって編纂（さん）された詳説日本史（山川出版社）によると二四五ページ新政への反動で「一八七三年（明治六）年には西郷隆盛、板垣退助らが唱えた征韓論には、この様な不平士族の不满を外征によってそらそうとする狙いもあった。然しこの時、欧米各国の視察を終えて帰国した岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文らは、内治の整備が急務であるという理由で外征に反対し、征韓論は

中止となった」。又、三省堂の高校日本史（門脇禎二京都府立大学教授、朝尾直弘京都大学教授、中塚明奈良女子大教授、木坂順一郎龍谷大学教授、井口和起京都府立大学助教授を著作者とする）によると、二〇〇ページ、明治初年の外交の項に「朝鮮との国交交渉が進まないま、岩倉ら不在中の政府では一八七三年政府首脳である西郷隆盛、板垣退助らが中心になって強硬な征韓論を主張し武力行使の方針を定めた。彼らの主張の背後には、対外出兵によって国内の緊張を高め、全土の士族の不满を解決しようとする意向もあったが、欧米視察から帰国した大久保利通始め、岩倉や木戸孝允らも内治の急を説いて朝鮮への出兵に強く反対した。その結果、政府は分裂し、西郷らは下野した」云々。又、稲坂泰彦、川村善二郎、村井益男、甘粕健の四氏が著者になって居る三省堂発行の「日本史」改訂版二一九ページ「自由民

権運動と帝国憲法の制定―士族の反乱の項には一八七三年、朝鮮との国交再開の交渉が難航して居るのを機会に、参議の西郷隆盛、板垣退助らは征韓論を唱え、政府もいったん、征韓論を決めて士族の不平を外にそらそうと図った。この時、外遊から帰国した岩倉具視、大久保利通らは国内政治の整備が急務であると説いて西郷らの主導による征韓の実行に反対した結果、征韓計画は中止となり征韓派は一斉に辞表を提出した。この分裂により、政府の実権は、大久保等が掌握する所となった。

嘘も百遍言えば本当になるとは、ヒトラーの言であるが、驚くべし。日本国民は以上のような曖昧（あいまい）にして謬節（びゅうせつ）、杜撰（ずさん）にして虚言に満ちた明治初年の現代史を、実に百年の長きに亘（わた）って教科書という最高の権威ある書物により各一流大学の錚々（そうそう）たる人々の

執筆によって聞かされ、読まされて来た。何人とも（いえど）も西郷征韓論、征韓論即西郷さんと言（い）イメージを叩き込まれて来た。日本を近代化した明治維新最大の功臣を斯様に寄ってタカって大陸侵略の尖兵（せんぺい）としての汚名を冠（かぶ）せた歴史はスターリンのトロツキー排撃以来、世界的に稀な事実と言（い）わねばならない。

西郷は軍人にして軍人に非ず

軍事評論家松下芳男氏は、西郷隆盛は明治五年六月十九日、日本陸軍初代の元帥となり、六年五月十日陸軍大将となって居るから、その圧力は後年の軍部大臣の比に非ず、西南戦争に於ける西郷党一連の目的と性格は単なる政治行動ではなく政治に圧力を加えんとした軍閥の行動だと論じて居るが、戦後、軍の攻撃者を民主主義のチャンピオンとして評価した低俗な世論迎合の評論家の妄説であって哲人西郷を斯様な佩剣を背景に物を言う軍閥重流の一人としか見ない近視眼的な批評家がかかる謬論（びゅうろん）を吐くので、益々、西郷征韓論のデッチ上げ議論の論拠が固まって行くのである。「ぬれ衣をほそうともせずこどもらがなすがままに果てし君かな」とは、盟友勝海舟が西郷に送った和文であるが、西郷隆盛は幕末島津藩の進路を開拓する為に君命によって島津藩軍賦役の地位に就いたが、彼自身は松下芳男氏の言う様な軍人では無い。西南戦争では私学校生徒に殉じた気持ちで全然軍の指揮権をとらず、元帥、大将と言っても本来、武道の心得も無く、況（い）わん）や戦略技術に疎い西郷を廃藩置県一年目に政府の御都合で大将にしたのは、当時の公卿と薩長政府の策謀であって、廃藩置県と云う我国未曾有の大変革の実行に当って明治維新最高の功労者として威望一世を覆う西郷の存在を利用した。

（この項続く）

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

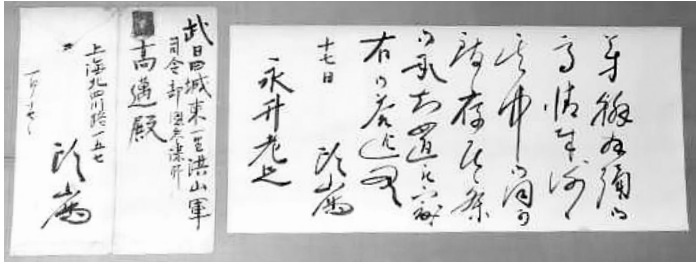
第82回

同時代から見た頭山満

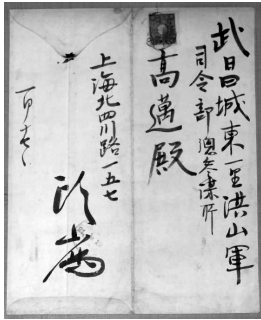
②6

一書と人物

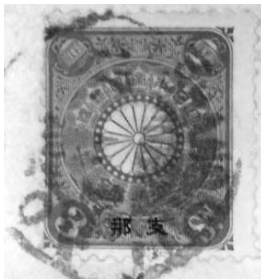
私が所蔵している頭山満の自筆書簡がある。私の手元に収まると秘蔵ならぬ死蔵になってしまうので、この際、この珍しい手紙を公にしておくことにした。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

私がお蔵している頭山満の自筆書簡がある。私の手元に収まると秘蔵ならぬ死蔵になってしまうので、この際、この珍しい手紙を公にしておくことにした。

現状は、切手が貼られた封書を切り開いて、手紙と一緒に掛け軸に仕立てられている(写真1)。虫食いやシミや破れなど、おろそかにされていた様子はなく、保存状態は極めていい。

宛名) 武昌城東一里洪山軍/司令部総参謀所(差出人) 上海北四川路一五七 頭山満 一月十七日

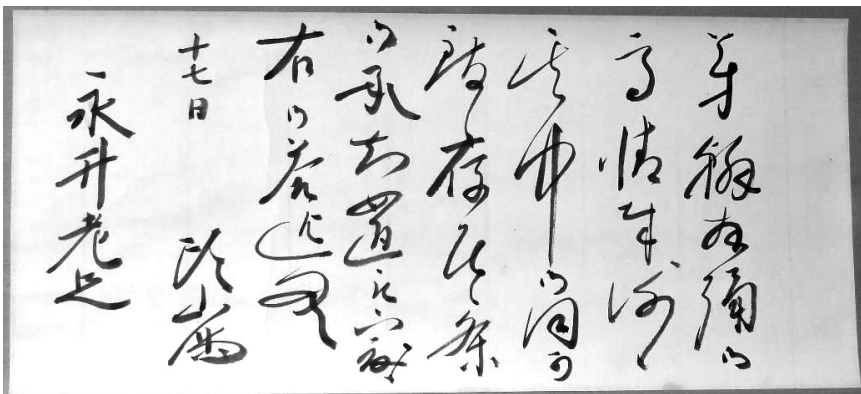
上海滞在中の頭山満が武昌の高邁に宛てた封書である(写真2)。手紙の内容はたいしたことはないが、辛亥革命の最中であることは明らかで、年号も大正元(一九一二年)と確定できる。当時の頭山満をめぐる社会状況を考えるとき、この封書はさまざまなことを語り始めるのである。

清朝打倒をめざす辛亥革命は明治四十四(一九一一年)年十月十日、武昌での革命派の蜂起によって引き起こされた。武昌は現在の中華人民共和国武漢市の一部で、漢口・漢陽とともに武漢三鎮と呼ばれた。武昌の洪山という地域(武漢市に洪山路という地名が今も存在する)にある軍司令部の高邁に宛てているのだが、手紙の前身では「永井老兄」と書かれているから、永井という日本人が中国名・高邁を名乗っているのだろうと想像される。

切手は菊切手の三銭(赤)(写真3)で、もちろん大日本帝国発行だが、切手の最下部に右から左へと「支那」という文字が後から刷り込まれている(「支那」加刷菊切手と言う)。それがなぜ上海から武昌への郵便物で通用したのかというと、中国(清国)で活動する日本の郵便局があったのである。切手の消印からは SHAN HAI、17・1・1 とかろうじて読み取れるが、一月十七日、上海の日本郵便局の消印ということになる。もうひとつ、頭山満の名前の部分にも消印があり、数字は 21・1・12(日・月・西暦年下二桁の順)、つまり一九一二年一月二日を示し、武昌の日本郵便局に届いた月日が押印されているのだろう。

手紙の内容は次の通り(写真4)。

「貴翰拜誦(お手紙を読みました)。御高情奉謝候(親切なお気持ちに感謝します)。其中御伺可致存居候条(その内、



(写真4)

お伺いするつもりですの)で、御承知置被下度候(ご承知置きください)。右御答迄。匆々。十七日 頭山満 永井老兄」

手紙では月日を書くのがルールだが、一月を書き落としている。内容は永井が頭山満を武昌に招待したことへの返事という逸脱すること、書法の奔放さを発揮することになるのだろう。

「頭山の一行は其後上海の四川路に一家を構へ、腰を落付けてヂツと形勢の推移を観望してゐたが」(『東亜先覚志士記伝』中巻、四七一ページ)

一家を構えたというのが差出人住所のことには違いない。右の記事の裏付けとなる点でもこの書簡は一層興味深い。

永井老兄に該当する人物は『東亜先覚志士記伝』下巻の列伝には見当たらない。